

「人間的なお産」を含む母子保健案件形成・実施の留意点

これまでの教訓

「人間的なお産」案件を分析して得られた教訓を可能な限り一般化し、「人間的なお産」に関する案件形成・実施にむけての留意点を以下に示します。

03 チームメンバーの選定

受入国：政策担当者と、リーダーシップを発揮できる産科・助産担当者

日本：助産専門家が専門分野に集中できるチーム作り
実務経験豊富な助産専門家、疫学／公衆衛生専門家の配置



02 キーパーソン 対象地域の選定

これまで築かれた
ネットワークの活用
中央レベル政策担当者
との共働

01 ニーズ調査／発掘

案件にコミットメントを持ち
継続して関われる人



04 計画の策定

詳細な現状調査を組み入れた
プロジェクトデザイン

05 「人間的なお産」 についての概念共有

「人間的なお産」とは何か、
なぜ「人間的なお産」というのか、
地域の特性や国際的な潮流に沿って
「人間的なお産」の概念をわかりや
すく表現して共有
(次葉以降参照)



07 「人間的なお産」体験 を支える環境整備

ケアの質の改善につながる施設や
「小さな機材」の整備 (次葉以降参照)



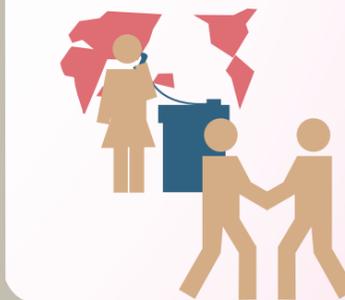
06 「人間的なお産」を 支える人材育成

医療従事者の内的な変革
(次葉以降参照)



08 (終了時) 評価 ラップアップセミナー

「人間的なお産」の本質を
評価指標に設定する工夫
案件を総括し、その成果を広く共有し
さらなるケアの質改善へ



09 持続性の担保

国内・地域・同一言語圏の
ネットワークの構築、活用

10 普及を担う 人材の育成

実践現場で研修を
受けられるシステム構築
大学などとの協働



自立発展に向けた取り組み 当該国の法律・ガイドラインなどの整備

国内外での広報、論文発表

「人間的なお産」とは 何ですか？



Photo: Sakae Kikuchi

お母さんには産む力があり、赤ちゃんには生まれてくる力があります。女性には、妊娠、出産を通じて、自分では気づいていなかった力に気づいていきます。「人間的なお産」は、お母さんと赤ちゃんが最大限に、自らの力を発揮できるようになることを目指すとりくみであり、本来の意味での「潜在能力 (capability) 開発」です。

1

女性が尊厳を持って扱われ、より優しくされる。そういうケアを通じて、女性はより力を発揮できるようになり、そのようなケアは、ケアを受ける女性だけではなく、ケアを提供する方もまた、自らの能力を開発させ、力づけられます。これこそが、相互のエンパワメント、という経験でしょう。こういうプロセスこそを、「人間的なお産」と呼んできました。

2

JICA は 1990 年代から、一貫して、「人間的なお産」を推進してきました。近年になって WHO も妊娠、出産に関わる分野で Respectful care や People centered care などと言及するようになりましたが、JICA はすでに四半世紀前から、「人間的なお産」ということばで、この分野の重要性を指摘してきました

3

1996 年のブラジルでのプロジェクトを始めるとして、ポリビア、アルメニア、マダガスカル、セネガル、カンボジア、ベナンで「人間的なお産」のプロジェクトを行ってきました。現在もエルサルバドル、アンゴラ、コートジボアールで、同様の取り組みが進んでいます。JICA は、世界に先駆ける形で、多くの経験を積んできたのです。

4

「人間的なお産」は世界中で行われている「妊産婦死亡率の低下」、「周産期死亡率の低下」をめざす緊急産科ケアのとりくみを補完し、すべての女性の関わる母性保健の枠組みをよりよくする重要なイニシアチブです。

5

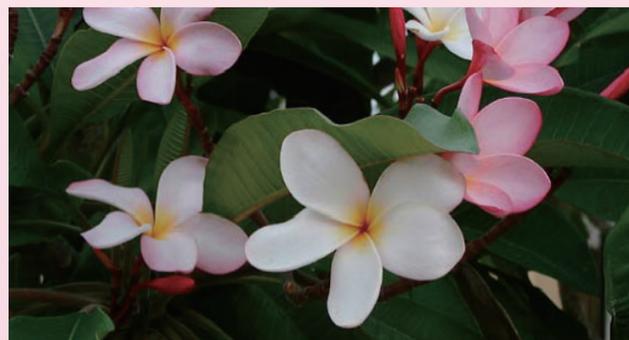


Photo: Sakae Kikuchi

なぜ「人間的なお産」 というのですか？



Photo: Sakae Kikuchi

「人間的なお産」という言い方をたどっていくと、ブラジル人教育家パウロ・フレイレの、尊厳や主体性を奪われた人々がそれを取り戻す過程を「人間化 (ヒューマニゼーション)」といったり、置かれた状況を「意識化」する、といった思想にたどり着きます。

1

パウロ・フレイレの思想を学ぶためには「被抑圧者の教育学」という本が有名で、保健医療のみならず、開発、国際協力に関わる世界中の人々から大切にされている本です。この本でヒューマニゼーションの概念が語られています。

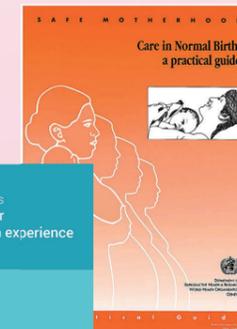
2

お産の場で考えてみましょう。出産する女性が、支援されるべき場所で、尊厳を無視された扱いをされる、科学的根拠のない不適切な医療介入を受けて心や身体が不必要に傷つく、逆に必要な時に適切なケアが受けられない・・・。

このような「非人間的」なお産の状況が世界中で起こっています。なぜこのようになっているかを「意識化」し、お産の場を女性の尊厳や主体性を尊重する「人間的」なものとしていきたい。JICA の「人間的なお産」「出生と出産のヒューマニゼーション」はそれを目指しています。

3

パウロ・フレイレ (1921年~1997年) ブラジル北東部ペルナンブコ州に生まれる。教育学者、哲学者。「意識化」「問題解決型教育」などを通じ、20世紀の教育思想から民主政治のあり方にまで大きな影響を与えた。その実践を通じて「エンパワメント」「ヒューマニゼーション(人間化)」という表現も広く知られるようになる



WHO の「正常産のガイドライン (Care in Normal Birth: a practical guide, 1996)」は「人間的なお産」の科学的根拠を示すものです。現在は、改訂版 (WHO recommendations: Intrapartum care for a positive childbirth experience, 2018) ができています。

4

「人間的なお産」を支える

人材育成



医療従事者の内的な変革

研修を通して、自分が優しくされたり尊重される経験は、医療従事者の内面的な変化につながりやすくなります。医療従事者は分娩の異常を発見し、分娩を管理する存在というだけでなく、お母さんの産む力、赤ちゃんの生まれる力を最大化するための存在となっていきます。



権威的態度から傾聴へ



医療の現場では、社会的立場が高い医療従事者が、無意識的に権威的態度をとってしまいがち。「傾聴」を体験する学習を通じ、プロセスを意識して、ケアの姿勢を学びます。対話し、傾聴し、グループの中で、自分を活かし、他者を活かすことで、ケアの本質が見えてきます。

情緒的・身体的に寄り添い支えるケアへ



Photo: Sakae Kikuchi

医療者からお母さんと赤ちゃんへの尊重、お母さんからの医療者への信頼といった双方向性の関係がベースとなります。

参加型 研修の実施

研修は、お互いの成長を感じ、実践のヒントを得る機会。Training of Trainers (TOT) は、回数を重ねることで、参加者の変革を起こす Training of Transformation へつながります。同じメンバーで定期的集まれる工夫があると継続的にお互いを励ましあうこともできます。

ベースとなる知識・技術の獲得

お母さんと赤ちゃんの2つの命を守るため、解剖生理やお産の進行の理解は必須です。医療者としての態度や姿勢は、深い知識に裏付けられ、出産という場の安全と豊穡を導きます。



「人間的なお産」体験を支える

環境整備



安全性と快適性

新しい命を迎え入れる場所は暖かく優しいものであってほしい。出産の場における安全性と快適性は、並立、共存し、影響を与えあいます。

産婦が力を発揮できる環境づくり

自身が選んだ人による付き添い、カーテンなどによるプライバシーの保護、医療者からの尊重されたケアはお母さんの出産満足度を高め、緊張がほぐれることで、お産が進みやすくなります。目に見える形で出産の形が変わるので、カーテンをつけて部屋を区切るだけでも、医療者へのデモンストレーション効果があります。



助産ケア

物理的な環境だけでなく、医療者の姿勢や言動も、出産に影響を及ぼす環境の一つです。助産師は、お母さんの声を聴き、表情を見て、体に触れて、分娩進行を的確に予測し支えることを目指します。

「小さな機材」



赤ちゃんの心音確認のためのトラウベやドップラー、お母さんのバイタルサイン測定のための体温計や血圧計、臍帯を切る清潔なハサミ。自由な体位のためのマット、クッションや分娩椅子、ポスターやフリップチャート…小さな機材供与はプロジェクトのシンボルともなり、ケアの改善にもつながります。

5S-KAIZEN

5S (整理・整頓・清掃・清潔・しつけ) -KAIZEN は日本が誇るアプローチ。業務環境改善できれいな職場や、空間の確保という印象を持たれますが、その実践の本質は、意識の変革や自立した職場のマネジメントにあります。

